

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12620

研究課題名（和文）災害・復興と伝統文化の役割に関する学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary research on disaster/reconstruction and the role of traditional culture

研究代表者

古沢 広祐（Furusawa, Koyu）

國學院大學・経済学部・教授

研究者番号：30219109

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、災害と復興に関する伝統文化の役割について、とくに津波災害で被災した地域を中心にフィールド研究を行った。また災害列島と呼ばれる日本において、古い社寺の伝承記録からの災害記録の抽出を行い、記録データベースを作成した。

東日本大震災の被災地域のコミュニティの再建においては、伝統文化の意義・役割として、とくに祭事、神楽などの儀礼や郷土芸能の役割は大きいものである。また、全国各地の神社などの宗教施設が保持する過去の自然災害記録から情報を抽出し、九州、本州、東北地方の災害記録データベースをまとめたことで、将来的な災害予防に役立つことが期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

伝統文化に関連して地域社会が継承する歴史・文化的な蓄積が、巨大災害を契機にして、とくに地域・コミュニティ再生において甦ってくることは、文化的レジリエンスとしての意義があり、社会のあり方を考える上で重要な意味を示唆している。過疎化や地域の衰退が進行する日本社会の将来に関しても、長い歴史的な視点からコミュニティ形成や人間存在の在り方を考える必要があり、震災復興の動向は先行する社会実験的な動きととらえられる。これは世界的にも共通する課題でもあることから、広く人類史的な意味から見ても注目すべき視点であり、国際比較を踏まえつつ今後の国際協力のあり方においても示唆を与えてくれる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a field study on the role of traditional culture in disasters and reconstruction, mainly in the areas affected by the tsunami disaster. In Japan, which is called the disaster archipelago, we extracted the disaster records from the old traditions of shrines and temples and organized the records database.

In the reconstruction of communities in the areas affected by the Great East Japan Earthquake, traditional culture plays a significant role in the meaning and role of rituals such as festivals and Kagura, and local performing arts. In addition, we will be able to help prevent future disasters, by extracting information from past natural disaster records data held by religious institutions such as shrines all over the country, especially disaster record data on Kyushu, Honshu, and Tohoku regions.

研究分野：環境社会経済学、持続可能社会論

キーワード：震災 復興 伝統文化 コミュニティ レジリエンス ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

國學院大學では、持続的発展社会モデル析出に向けた総合的学問領域の開拓を目的とした学際的研究事業として「共存学」研究プロジェクト(2010年～)を進めてきた。特に2011年東日本大震災以降、被災地をフィールドとした調査を行い、「自然環境」と「人」の「共存」関係について学際的な視点から分析し「災害復興」の課題や原動力について研究を進めてきた(『共存学 1・2・3』、國學院大學研究開発推進センター編、弘文堂)。災害復興過程における人々の暮らし・コミュニティ・文化など(ソフト面)での再建の重要性が認識され、被災地復興がハード面のみならず地域コミュニティに深く関わる伝統文化の役割が注目されたのだった。共存学での蓄積を踏まえて、伝統文化に内在する可能性として、コミュニティの維持・活性化と復興の原動力としての祭事・郷土芸能のはたす役割に関して、本研究に取り組みに至った。関連して、宗教文化と自然災害に関わる歴史資料から、災害情報を収集し分析することで地域史から自然災害の記録を掘り起こすことにも取り組んできた。

2. 研究の目的

これまでの研究蓄積と活動をベースにして、本研究のテーマ「災害・復興と伝統文化の役割に関する学際的研究」を設定し、大きく以下の2つの柱立てで研究に取り組むことにした。

(1)震災・復興地域において、伝統文化の役割についての研究。祭事、神楽、民俗芸能を中心に、地域コミュニティの復興における伝統文化の意義・役割・可能性を明らかにしていく。

(2)自然災害と地域史に関する研究という課題を設定し、古い歴史資料・文献(神社関係が中心)から自然災害の記録を抽出してデータベースを作成する。

3. 研究の方法

(1)は、國學院大學の茂木栄・黒崎浩行、帝京大学の吉野裕、長崎大学の滝澤克彦、皇學館大学の齋藤平が中心となり、東日本大震災被災地の状況を中心に伝統文化・宗教に関わる活動状況について、フィールドワークを行うことで明らかにする。

(2)は、神社関係自然災害データとして、太平洋・瀬戸内海に面した諸国に所在する延喜式内社の記録(『延喜式』巻8・9所載の神祇)のうち、自然災害に関する伝承を持つ神社を抜き出し、災害に関する記載事項を抽出してデータベースを作成する。

4. 研究成果

(1)三陸地域にみる文化的レジリエンスの人類史的意味

豊かな自然・伝統文化を育んできた東北地方、三陸地域一帯は、祭りや、神楽などの郷土芸能が人々の日々の暮らしと深く結びついて継承されてきた地域である。これまで過去のものとして忘れ去られてきた伝統文化、とりわけ地域社会が継承する歴史・文化的な蓄積が、巨大災害を契機によみがえってきた動きは大変に興味深い。復興への歩みが進行し、徐々に日常を取り戻してきたが、見えない形での困難を抱える厳しい現実も続いている。高台移住、巨大防波堤の建設などハード面での復興が話題になる一方で、ソフト面の人々の暮らし・コミュニティ・文化面での再建の重要性があらためて注目され、評価されてきている。

東北地方は、かねてから伝統芸能や祭事などが人々の暮らしと深く結びついて脈々と引き継がれてきた地域である。厳しい気候風土の東北地方は冷害や凶作に苦しんできた土地柄から、人々の自然への畏敬の念は深いものがある。多くの祭事は、厳しい自然のなかでの飢饉、疫病、災害などによる人々の苦難、尊い生命が失われた出来事などに対する、鎮魂や供養といった鎮めの意味をもっていた。人々の暮らしの根っこに深く関わって祭事があり、村々に民俗芸能いわゆる郷土芸能が継承されてきたのであった。

人々の暮らしの根っこに深く関わって祭事があり、村々に民俗芸能いわゆる郷土芸能が継承されてきた事実、震災後に三陸地域を訪れてあらためて実感させられた。訪問先の各地で、神楽、虎(とら)舞(まい)、鹿踊(ししおどり)、獅子舞(ししまい)、剣舞(けんぱい)などに接したが、そこに秘められていた力をまさに実感することができた。深刻な津波災害を受けた地域で催された行事、舞う人も、観る人達も、すべてを流された人々が集う場において、そこでの舞いの姿には、過去や現在の鎮魂の想いが二重写しのように表出していた。復興を祈願し催される祭事、そこに参集する人々の様子には、魂の深層に引き継いできた共感が甦り、心を動かされ、まさに感動の涙と笑顔が交錯するような一体感が醸成されていたのだった。

こうした個が共同・歴史性の中で結束と社会形成に繋がりうるポジティブな側面とともに、結束自体が足かせとして作用する側面もあり、多様な展開としては注意しておきたい点である。

震災後、継続的に訪問・調査してきた地域の人々の対応状況、そこでくり広げられる諸活動の事例を通して、社会形成に関する学べき事柄が数多くある。それは、人間存在の在り方や日本社会の姿を見直す意味でも、また広く世界や人類史的な視点から見ても注目すべきものであり、一種の文化的レジリエンスのあり方への示唆を与えている。(古沢広祐、國學院大學)

(2)変化する災後の地域において宗教が担う持続性

本報告では3つの事例に注目した考察について概要を紹介する。1つは、岩手県陸前高田市において被災後も継続してきた8月7日の行事、「うごく七夕」・「けんか七夕」である。被災後に持続した祭礼に関しては、この他に宮城県山元町の八重垣神社例祭、宮城県気仙沼市本吉町の小泉八幡神社例祭、宮城県石巻市雄勝町の葉山神社亥年御開扉大祭、宮城県東松島市宮戸浜のえんずのわり、などについても現地訪問調査を行っており、共通点がかいま見える(詳細は別稿に譲る)。次は、三陸沿岸の自然環境保護と交流人口の拡大に寄与する官民連携の取り組みにおける宗教空間の存在があり興味深い。具体的には、環境省の事業「みちのく潮風トレイル」におい

で探索・整備の対象とされた道の中に、その地域の宗教文化に関わりの深いものがみられる(2018年9月調査)。その意義と可能性が考察できる。最後に、津波によって流失した碑が後に発見され、神社境内に安置された事例(2018年9月、2020年1月調査)を取り上げる。

東日本大震災により陸前高田市では人口の7.2%におよぶ1,757人が犠牲となり、中心市街地は津波によって壊滅的な被害を受けた。市は、「災害に強い安全なまちづくり」を掲げ、住宅地の高台・後背地への移転と、大規模な土地のかさ上げによる中心市街地の整備を進めていった。そうした中で、「うごく七夕」・「けんか七夕」は、地域住民と地域外から訪れる150~200人のボランティアによって継続されてきた。「けんか七夕」は、祭礼の中心地である気仙町今泉地区が壊滅的な被害を受け、コミュニティの結束が危ぶまれる中で、一基の山車で復活をとげた様子が池谷薫監督のドキュメンタリー映画『先祖になる』(2012年)に記録されている。翌年の2012年から山車は2基となり、かさ上げ工事の影響により毎年少しずつコースの変更を余儀なくされつつも、この2基で「けんか七夕」は続いている。

2019年8月7日の「けんか七夕」では、被災前にあった「鉄砲町」の跡地に道路が通じ、鉄砲町の元住民を中心に山車を曳いていく様子が見られた。また、山車の名前も、2012年以来、「今泉組」・「気仙組」となっていたが、2019年より「鉄砲町」・「八日町」に改められた。被災前は「八日町」は「上八日町」と「下八日町」に分かれており、このほかに「荒町」の山車もあった。こうしたことは主催者のアナウンスで告げられ、地域外から訪れている多くのボランティアや見物者も、地域住民がそこに込めている思いを共有することができるように配慮されている。

高田町の「うごく七夕」は、2017年4月に開業した複合施設「アパッセたかた」を中心とする市街地に各地区からの山車が集結するようになっている。2019年8月7日は中央・荒町・大町・和野・松原・大石・駅前組・川原・鳴石・長砂の10基の山車が集結し、練り歩いた。和野組の山車を曳いていた人によると、山車につける七夕飾りは、当日の1ヶ月前から町内会の集会所に集まり、班に分かれて交代で作ってきたという。また、地区ごとに祭り好きがいてリードしているという。他方で大勢のボランティアや見物者の存在も祭りの執行に欠かせない様子がうかがえる。同じ人によると、以前(東日本大震災よりも前)週末開催に変えてみたことがあるが、予定を立てられなくて困るという声が訪問者から寄せられ、それで8月7日固定で続いているとのことである。(写真「うごく七夕」(左)「けんか七夕」(右)2019年8月7日筆者撮影)

祭礼と宗教者との関わりについては、中心市街地での賑やかな練り歩きのさいには一見うかがえないが、各地区での山車の出発時に神主または僧侶による祈祷が行われている。「けんか七夕」では、成田山新勝寺の僧侶が狩衣を着装して神道式で祈祷を行っている。また、祭りの意味を地元住民に問うと、陸前高田市の七夕祭りは盆の先祖供養が起源であり、震災犠牲者の慰霊の意味も込められているという答えが返ってくる。集落移転や市街地整備の影響によって祭りの執行に変化を蒙り、ボランティアの支援を必要としつつも、地域住民の被災前の暮らしや結束、あるいは先祖の記憶を継承するものとして祭礼が意義づけられていることがうかがえる。同様の特徴は、他地域の祭礼にも共通して見られるところである。



環境省の事業「みちのく潮風トレイル」は、東日本大震災によって津波被害を受けた東北地方の太平洋沿岸部を徒歩で縦断できる道を整備し、地域の自然環境、歴史文化、食文化に触れる機会を作る官民連携の取り組みである。2019(令和元)年6月9日に全コースが開通し、式典が宮城県名取市で行われた。2018年9月23日に、環境省の施設「南三陸・海のビジターセンター」が「みんなで歩こう!みちのく潮風トレイル in 南三陸」という企画を実施した。これは、「みちのく潮風トレイル」に指定され、整備された田東山(宮城県南三陸町歌津・宮城県気仙沼市本吉町)の登拝道、「行者の道」を、自然と歴史のガイドつきで歩くというもので、筆者を含め約10名が参加した。この企画を立てたスタッフのH氏は、三陸沿岸の自然環境と宗教文化との結びつきに関心を寄せており、こうした「信仰の道」に多くの人が気づいてほしいという。

筆者は「みちのく潮風トレイル」のごく一部しか踏査していないが、例えば、広田半島(岩手県陸前高田市)のルートには黒崎仙境があり、ここは黒崎神社の奥宮に通じる道となっている。船越半島(岩手県下閉伊郡山田町)の荒神社に至る道も「みちのく潮風トレイル」に指定されている。また、「みちのく潮風トレイル」とは別に、気仙沼観光コンベンション協会が企画している「宮城オルレ 気仙沼・唐桑コース」では、唐桑半島突端の御崎神社がコースに入っていて、唐桑半島の住民による参詣道とも重なるという。今後、こうした道の信仰面での意義や価値が、

どのような担い手によって、どのように発信されていくのかに注目したい。

また、津波によって流失した碑が後に発見され移動設置されている事例に、宮城県気仙沼市本吉町の小泉八幡神社「魚魂碑」や陸前高田市の氷上神社参道に設置された石川啄木の歌碑などがある。地域の人々の歴史文化に根づいた様々な動きがあるが、復興をめぐる課題に宗教文化が一定の役割を果たす動きとして、今後とも注目していきたい。(黒崎浩行、國學院大學)

(3) 東日本大震災の被災地における祭礼文化の現況 宮城県石巻市北上地区を中心として -

本研究(災害・復興と伝統文化の役割に関する学際的研究)において、宮城県石巻市北上町の漁村に伝わる3種類の祭礼文化(法印神楽・南部神楽・獅子舞)に注目し、これらが2011年の東日本大震災以降、いかにして復活を遂げたかについて、宮城県仙台市・石巻市での現地調査の成果をもとに解明を試みた。その結果、以下の知見を得ることができた。

東日本大震災以前の北上町では、住民たちが法印神楽・南部神楽・獅子舞を継承すべく、それぞれ複数の保存会を組織していた。だが、東日本大震災の折にこれらの団体も被災し、全ての団体が祭礼文化継承の危機に陥った。東日本大震災後、北上町では獅子舞の保存会が早期に活動を再開させたが、神楽の保存会の中には活動の継続を断念したものも存在する。これは、後者が舞台・衣装をはじめとする多数の祭礼道具を必要とすることや、その舞手に記紀神話に関する知識や優れた音感・身体能力が要求され、後継者の育成に多くの時間を要することによる。このように北上町の神楽には「継承を妨げる要素」が多数みられるが、東日本大震災以降、法印神楽の保存会は活動規模を縮小させはしたものの、令和期においても精力的に活動を展開している。現地調査の結果、近世期以降、南三陸地方一帯において法印神楽を継承する神楽団(現在の保存会の前身)が人的資源の派遣・祭礼道具の貸与・技術指導などを相互に行い、各団体の存続を促すという伝統を有しており、この有機的な関係性こそが東日本大震災で被災した法印神楽を復活させる礎となっていたことが判明した。

以上の研究成果を、吉野 裕(2020):東日本大震災の被災地における祭礼文化の現況 宮城県石巻市北上地区を中心として - 國學院大學研究開発推進センター研究紀要 14号、149-173頁、ならびに、吉野 裕「東日本大震災の被災地における祭礼文化の継承と現況-宮城県石巻市北上町の法印神楽を事として-」日本地理学会(ポスター発表)、2020年で公開した。

また、法印神楽の担い手である「法印(修験者・神職)」たちの霊山参詣に係る近代期の資料を入手・閲覧する機会に恵まれた。そこで、近代期に法印たちを含む東日本太平洋沿岸部の人々が、東北地方各地の霊山にどのように参拝していたかについても解明を試み、その成果を吉野裕「近代の東北地方太平洋沿岸地域におけるお山参り」日本山岳修験学会(口頭発表)、2019年としてまとめ、発表した。(吉野 裕、帝京大学)

(4) 災害からのコミュニティ復興、伝統文化の役割と継承

東日本大震災が直後から、私たちは伝統的な宗教的自然景観と(主に鎮守の森と神社)が被災を免れて、何もなくなった集落の中で、無傷で建っている光景を随所で見えてきた。これが何を意味するのかを、その経過を観察し続けることで探ってきた。災害後、残った神社とコミュニティ復興の推移を見ながら、神社に付随したソフトウェアとしての祭や民俗芸能、行事が大きな力になっていったことを観察することができた。

そして以下のようなポイントを見出し、報告書本編にてまとめた。神社は津波に流されにくかったがcommunityは失われた、聖地化する場所の出現 神社跡地、communityのhardware 神社とsoftware 祭・神事芸能、祭・神事芸能の自粛から死者供養の芸能への要請、楽器・衣装の失われたsoftware 祭・神事芸能の復活、祭・芸能の隆盛状態について。

上記のポイントを中心に、伝統的宗教景観が自然災害から人々を守り、その後の復興の礎になったのかという事例を記述することで、以下の内容について明らかにしようと試みた。

(1)コミュニティの復興と伝統文化の継承として、火災を退けた奇跡の社として祭のシステムが被災者を助けた大槌町の二つの小鎚神社(小鎚神社、臼澤小鎚神社)など。

(2)鵜住神社(鵜住居 津波てんでんこ・奇跡と悲劇、供養絵馬など)重要社叢の現況記録調査、震災シンボルの誕生と聖地化と今後について。

(3)山田八幡宮神輿修復終了・奉祝神輿渡御祭及び八幡宮神幸祭復活を中心に

(4)命を守る山 いのち山伝承(静岡県袋井市)(旧浅羽町)として、中新田命山(静岡県袋井市中新田) 大野命山(静岡県袋井市大野) 平成の命山(静岡県袋井市旧浅羽町) 宮城県名取市 関上港日和山 各地の日和山の事例(新潟県新潟港日和山、福井県坂井市三国湊日和山、茨城県ひたちなか市那珂湊日和山、三重県鳥羽市鳥羽港日和山、三重県志摩市磯部町小的矢日和山、大の矢日和山)について。

以上、大津波から住民の命を守った森の話、住民の命を高潮・津波から守るために築かれた命山、海と空を観察するための日和山、災害から命を守る伝統的なシステムが、調査研究を重ねる中で明らかになってきたと言える。詳細は全体報告書を参照願いたい。(茂木 栄、國學院大學)

(5) 地域の復興と神社祭礼 宮城県岩沼市の事例を中心に

私は、東日本大震災後の地域社会と民俗文化という問題について、宮城県の岩沼市で継続的調査を行ってきた。この地域の特徴は、いわゆる「伝統文化」「民俗文化」が、復興において中心的な役割を果たしてこなかったこと、そしてそれゆえに調査や報道において、それら「文化」が

取り上げられることが少なかったことである。一方で、岩沼市は、集団移転の決断や実行が市町村単位でもっとも早くスムーズに行われたこともあり、復興の「トップランナー」と呼ばれてきた。特に、それが単なるスピードだけではなく、避難から仮設住宅への入居、集団移転にいたるまで、もともとあった集落のまとまりをできるだけ維持する形で進められてきたことや、移転先の設計が住民の主体的関わりによって進められてきたことなどから、コミュニティ維持の点でも肯定的な評価を受けてきた。一般に、社会科学的研究において地域の復興と民俗文化は、正の相関関係で語られることが多いので、岩沼はその興味深い反例となっている。

なぜ、岩沼市においては、地域の伝統行事や民俗文化が復興において中心的な役割を果たしてこなかったのか。人々はそのことを含めて、復興過程における地域の文化をどのように認識してきたのか。また、地域の伝統行事や民俗文化に対する外部の視線や言説と居住者の意識の相互作用は、地域の状況自体にどのような影響を与えるのだろうか。神社祭礼を中心に考察する。

まず、岩沼市においては、震災後、神事のみをの行事を除けば、もともとあった祭礼は6つの地域のすべての神社において復活していない。一方で、移転する住民はもともとの神社の祭礼については残る住民に委譲する考えが強く、積極的な関与を控える傾向があった。そのため、残されたわずかな住民にとって神社維持が負担となる一方、移転した住民は新たな場所で「前向き」にコミュニティを形成することが可能となっている。そこには、集団移転地が、被災6地域を集める形で成立しているため、他の地域に配慮し、移住前の地域性を前面に出すことを控えているという事情もある。新たな移転先の「玉浦西地区」を象徴するものは、「創造された伝統」としての盆踊りや神社との関わりをもたない新しい子供神輿、小学校の学区単位で近隣の子供と合わせて行われる「ソーラン節」などである。文化や行事に対する住民の関わりは、必ずしも消極的ゆえではなく、彼らなりのバランス感覚にもとづいていることが分かる。

一方で、宮城県全体でみた場合、神社祭礼の現状についての報道は、二極化傾向を強めている。石巻市大須八幡神社例祭の海中神輿渡御などのように、季節の風物詩として毎年報道されるものがある一方、多くの神社は報道自体極めてまれであり、岩沼市の神社もそうである。ある新聞記事では、先述した移転住民の消極的関わりが「突き放した態度」と表現された。また、岩沼市とNHKの関与で行われた2015年7月の「玉浦西地区まち開き感謝祭」では、地域とは関係のない神主が祈祷した神輿について批判的な住民もいる。住民は、復興における民俗文化に必ずしも無頓着なわけではない。

被災と移転という地域社会の激変のなかで、民俗文化がどのような意味をもつのかは、元の地域の人口規模や産業構造、契約講・町内会などの地域組織形態、被災状況、移転のあり方などを注意深く比較しなければならぬ。そのためには、示唆的な事例に注目するだけでなく悉皆的な調査を継続していく必要があるだろう。岩沼は、ある特徴的な一つの事例ではあるが、それが復興と民俗文化の関係のどのような側面をあらわしているのかについては、今後の課題である。

(滝澤克彦、長崎大学)

(6)「延喜式内社(太平洋・瀬戸内海岸)自然災害伝承データベース」

本データベースは、太平洋・瀬戸内海に面した諸国に所在する延喜式内社(『延喜式』巻8・9所載の神祇)のうち、自然災害に関係する伝承を持つ神社を抜き出し、災害関連記載を抽出してまとめたものである。地域の人々がいかに自然災害と向き合い共存してきたかを神社信仰と自然災害の記憶・伝承の側面から明らかにしている。

古代からの自然災害伝承・記録に注視したが、神社の由緒、古代からの神社の沿革、六国史などの記載をまとめ、式内社研究・神社史の成果を反映している点は本データベースの特徴である。特に発生が懸念されている東海・南海沖地震を念頭に置き、太平洋・瀬戸内海岸を優先的に取り上げている。本データベースで整理した自然災害の記録・伝承には六国史などの国家・公的な歴史史料に記録されたもの少なくないが、多くは近世以降の編纂物に引載された社伝・伝承であり、当該地域や神社に関する人々の記憶や印象に基づくものである。これらは、近世以降の人々により記録されたものであるから、記録者や伝承者の状況が反映され、後代の手による改変・創作の可能性も想定される。

神社にまつわる自然災害伝承を整理することは、それが歴史的事実ではないとしても、人々がどのように自然災害と神社を認識してきたかを明らかにしている。

本データベースはExcelファイルで作成しており(4MG)、國學院大学デジタル・ミュージアムの資料データとして将来的に公開の方向で調整している。

データベースの作成作業は、藤本頼生(國學院大学)・松本久史(國學院大学)の指導の下で、主として塩川 哲朗(國學院大学大学院)が行った。

以上、3か年に及ぶ研究プロジェクトの成果報告の概略をまとめた。個別研究とくにフィールド調査に関しては、被災状況や移転とコミュニティ形成など地域・歴史性や居住する人々の多種多様な要素が複雑にからんでおり、実態究明に関してはさらなる調査研究が必要である。時間スケールとして中長期的な視点を意識し、自然災害伝承データベース作成に取り組んだが、その内容評価や今後の防災にどう生かせるかについては、今後とも課題として取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 古沢広祐	4. 巻 48号
2. 論文標題 共生社会を実現するSDGs 経済システムと世界観の転換	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 BIOCITY	6. 最初と最後の頁 p43、p49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 吉野 裕	4. 巻 14号
2. 論文標題 東日本大震災の被災地における祭礼文化の現況 宮城県石巻市北上地区を中心として -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院大學研究開発推進センター研究紀要14号	6. 最初と最後の頁 p149、p173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 國學院大學研究開発推進センター編（斎藤平、藤田直子、筒井裕、滝澤克彦、阿部晃成、古沢広祐、黒崎浩行）	4. 巻 13巻
2. 論文標題 研究会記録 平成29年度共存学公開研究会；復興・伝統文化と地域の自立性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國學院大學研究開発推進センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 231~291
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 古沢広祐	4. 巻 82巻
2. 論文標題 人口減少社会をどう迎えるか：みんな幸せな社会を実現するために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊ピープルズ・プラン	6. 最初と最後の頁 40-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古沢広祐	4. 巻 12巻
2. 論文標題 「総合人間学」構築のために(試論・その1):自然界における人間存在の位置づけ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 総合人間学研究 第12号(オンラインジャーナル)	6. 最初と最後の頁 3-8
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古沢広祐	4. 巻 85巻2
2. 論文標題 エコロジーと農業がむすぶ新潮流 日本の農業・農村とアグロエコロジー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 6-16
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 筒井裕	4. 巻
2. 論文標題 東京都三宅島神着における初午祭の継承に関する文化地理学的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『離島研究』	6. 最初と最後の頁 143-156
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古沢広祐	4. 巻 Vol. 11, No. 1
2. 論文標題 震災・復興と地域の力ー宮城県北部,登米・南三陸・北上地域を事例に(中間報告)ー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 共生社会システム研究(共生社会をつくる:時代の閉塞を超えて)	6. 最初と最後の頁 67-68
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古沢広祐	4. 巻 第29回
2. 論文標題 世界とつながる「みちのく潮風トレイル」～私たちはどこへ向かうか?～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 サステナブル・ブランド ジャパン「SB-J ネットコラム」サステナビリティ 新潮流に学ぶ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古沢広祐	4. 巻 第17回
2. 論文標題 「世界で一番面白い街」のつくりかた 震災復興、ISHINOMAKI 2.0の挑戦	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 サステナブル・ブランド ジャパン「SB-J ネットコラム」サステナビリティ 新潮流に学ぶ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古沢広祐	4. 巻 第11回
2. 論文標題 震災・復興とお祭りの復活 サステナビリティの底流	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 サステナブル・ブランド ジャパン「SB-J ネットコラム」サステナビリティ 新潮流に学ぶ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 古沢広祐
2. 発表標題 被災地復興と伝統文化に関する一考察 三陸地域にみる文化的レジリエンスの人類史的意味について
3. 学会等名 地球システム倫理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古沢広祐
2. 発表標題 Re-evaluation of Livelihood Based on Agricultural Activities(地域農業がもつ生活価値の再評価)
3. 学会等名 (国際会議ERPS2019) : RURALITIES IN ACTION (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古沢広祐
2. 発表標題 SDGs時代の日本の地域・農業・農村
3. 学会等名 共生社会システム学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉野 裕
2. 発表標題 近代の東北地方太平洋沿岸地域におけるお山参り
3. 学会等名 日本山岳修験学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉野 裕
2. 発表標題 東日本大震災の被災地における祭礼文化の継承と現況-宮城県石巻市北上町の法印神楽を事例として-
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 滝澤克彦
2. 発表標題 現代社会のリスクをめぐる超域的議論のための宗教学的枠組みに関する一考察 「超越的なもの」とローカリティの関係をめぐって
3. 学会等名 「宗教と社会」学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒崎浩行
2. 発表標題 災害後の集落の変化と祭礼文化の包摂性
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 黒崎浩行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 269
3. 書名 神道文化の現代的役割 地域再生・メディア・災害復興	

1. 著者名 古沢広祐	4. 発行年 2020年
2. 出版社 農山漁村文化協会	5. 総ページ数 245
3. 書名 食・農・環境とSDGs 持続可能な社会のトータルビジョン	

1. 著者名 國學院大學研究開発推進センター共存学グループ 編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 國學院大學研究開発推進センター	5. 総ページ数 104
3. 書名 復興・伝統文化・ネットワーク : 東日本大震災から七年目の今	

1. 著者名 古沢広祐	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ほんの木	5. 総ページ数 184
3. 書名 みんな幸せってどんな世界 共存学のすすめ	

1. 著者名 Susan Bouterey, Lawrence E. Marceau, Yuko Shibata, Katsuhiko Takizawa, Patrick Cadwell, Hiroki Takakura, Akiko Horita, Rosemary Du Plessis, Judith Sutherland, Liz Gordon, Helen Gibson, Paul Millar, Christopher Thomson, James Smithies, Jennifer Middendorf	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 191
3. 書名 Crisis and Disaster in Japan and New Zealand: Actors, Victims and Ramiification	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤田 直子 (Fujita Naoko) (20466808)	筑波大学・芸術系・教授 (17102)	
研究分担者	吉野 裕 (Yoshino Yuu) (20742092)	帝京大学・文学部・准教授 (32643)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	齋藤 平 (Saito Taira) (70247758)	皇學館大学・文学部・教授 (34101)	
研究分担者	滝澤 克彦 (Takizawa Katuhiko) (80516691)	長崎大学・多文化社会学部・教授 (17301)	
研究協力者	塩川 哲朗 (Shiokawa Teturou)		
連携研究者	茂木 栄 (Mogi Sakae) (70200326)	國學院大學・神道文化学部・教授 (32614)	
連携研究者	黒崎 浩行 (Kurosaki Hiroyuki) (70296789)	國學院大學・神道文化学部・教授 (32614)	
連携研究者	松本 久史 (Matumoto Hisasi) (20365513)	國學院大學・神道文化学部・教授 (32614)	
連携研究者	藤本 頼生 (Fujimoto Yorio) (30612163)	國學院大學・神道文化学部・准教授 (32614)	